



有田誠(ありたまこと) 京丹波町在住の映画愛好家
写真は小林旭と八名信夫(『頂上作戦』セットで筆者撮影)

笠原和夫脚本、深作欣二監督による『仁義なき戦い』

四部作から五十年以上が経った。『第一作』、『広島死闘篇』、『代理戦争』、『頂上作戦』と、敗戦から六〇年代までの日本戦後史を広島やくざ戦争と重ねたこのシリーズは、七二年から七三年の正味一年間で製作された。『仁義なき戦い』と銘打った作品はあと四本あるが、笠原は『もう書

撮影所で数日間、取材させてもらった。

以来、深作監督の新作の度に撮影所をのぞくようになった。『青春の門』(八一年)では、つい遊びで、菅原文太の子分でドロブク(カルピス)を飲むシーンに出演。松坂慶子の前でNGの連続。「君は役者にはなれんなあ」と深作監督に断言された。

《日本近現代史と東映》

大学時代は新宿東口の東映専門の昭和館に毎週通った。三本立てで年間百五十本以上を三年間見続けた。つくづく理解したが、東映映画は反権力的政治映画なのであった。七本紹介する。

『日本大俠客』(マキノ雅弘 六六年) 一八九六年、八幡製鉄所建設に沸く北九州若松。侠客から実業家、衆議院議員となる吉田磯吉(鶴田浩二)を描く。脚本笠原和男。『兄弟仁義 逆縁の盃』(鈴木則文 六八年) 四日市で廃液を垂れ流す化学工場が、やくざ(金子信雄)を使って、漁師を弾圧しようとする。菅原文太、若山富三郎、北島三郎が漁師とともに戦う。『関東やくざ者』(小沢茂弘 六五年) 一九一八年、米騒動の時、政府の備蓄米を放出させようとする実業家

(村田英雄)とやくざ(鶴田浩二)の物語。米騒動で私腹を肥やそうとする政治家(内田朝雄)と戦う。敵のやくざは丹波哲郎。『昭和残侠伝 人斬り唐獅子』(山下耕作 六九年) 玉の井の娼婦を上海や満洲に売り飛ばし、「無頼の徒として嫌われてきた諸君が、国家のために尽力する時だ」と檄をとばす政治家(内田朝雄)とやくざ(須賀不二男)に対抗する浅草の大親分(片岡千恵蔵)、高倉健、そして池部良。

『日本大俠客伝 刃』(小沢茂弘 七一年) 金沢を舞台に民衆側に立つ代議士(木本実)を支援する車夫会社社長(辰巳柳太郎)が襲撃される。第二回衆議院選挙で野党の選挙妨害をする政府、壮士(玄洋社がモデル 渡辺文雄)

やくざに、車夫(高倉健)が立ち上がる。脚本笠原和男。『緋牡丹博徒 一宿一飯』(鈴木則文 六八年) 蚕農を搾取する高利貸(遠藤辰雄)に殴り込む博徒戸賀崎栄助(水島道太郎)は、明らかに秩父事件の博徒田代栄助がモデル。舞台を上州に移し、国貞忠治を唄った八木節に合わせ、櫓上で樽を叩く矢野竜子(藤純子)の姿から映画は始まる。

『日本暴力団 組長』(深作欣二 六九年) 山口組が関東に乗り込む話しが土台になっている。開巻、カメラが斜めになり、ストップがモーシヨンにテロップが入る。『仁義なき戦い』のスタイルはここで始まっている。東西の大組織が神社で愛国同志会を結成し手打ちをする。全員で「君が代」

を唱和する。政界の黒幕(河津清三郎)は言う。「七〇年安保に備え、我々も事を進めねばならない」。出所した戦中派の男(鶴田浩二)が殴り込み、玉砕する。そう言えば、梶芽衣子の『女囚701号さそり』(伊藤俊也 七二年)では、岩に波が砕ける東映マークに「君が代」が演奏され、ラストは白地に黒い日の丸のアップが映し出された。

《東映と満洲》

坪井興(六〇年代当時専務)

満洲映画協会(満映)では甘粕正彦理事長の右腕。東映復興の立役者である。「やくざ映画こそピカピカ光る大衆の魂をわかり易く表現することが出来る」。

川谷拓三(一九四一〜九五)

『仁義なき戦い』シリーズでスターに登りつめた大部屋俳優。満洲新京の生まれ、父はカメラマン。『広

島死闘篇』で千葉真一

や八名信夫らに海で大リンチを加えられ、泣いて命乞いする。『県警対組織暴力』(七五年)では、警察の取調室で菅原文太、山城新伍の刑事に、深作監督の許可と本人の希望で本当に殴り蹴られ、顔が腫れあがった。翌年の『やく

ざの墓場』では、逆に刑事役で、道場にやくざを連れ込むが相手の方が強かったという爆笑シーンがあった。この作品は大阪府警上層部の汚職、満洲帰りの刑事(渡哲也)とやくざ(梅宮辰夫)の兄弟盃、在日朝鮮人(梶芽衣子)との恋、府警本部長が大島渚、副本部長が成田三樹夫、地元署長が金子信雄と、何から何までコテコテの映画である。悪ふざけで「文化庁芸術祭参加作品」と予告編、本編に入っているが、文化庁は直前に取り下げた。それを無視してタイトルは直していない。

汐路章(一九二八〜九四)

京都下鴨生まれ、太秦小学校卒。満洲開拓少年義勇軍に入り、満洲へ渡る。満映にいた加藤泰監督の作品には必ず出演した。アクの

強いギョロ目。その顔を忘れることは出来ない。『代理戦争』では小学校の先生役。どう仕様もない教え子(渡瀬恒彦)を組に入れてくれと菅原文太に頼みに来る役。『県警対組織暴力』では「アカが悪い」が口グセの刑事。筆者と一緒に写真を撮ってもらったのは、汐路章と夏目雅子だけである。満洲で覚えた野菜作りと日曜大工を趣味とし、無料の書道教室を開いていた。

吉田貞次(『仁義なき』の撮影)

満洲でカメラマンとして啓民映画(記録映画)を撮っていた。加藤泰監督との『風はこわい』(四三年)や『白頭山』(同、「規律と生産」(四五年)がある。

並河正夫(『小指のない門番』)

戦前からの京都の博徒中島会の中島源之助の元舎弟。

中村錦之助の用心棒をしていて東映に入る。ロケ先のかやくざの妨害を追い払う「露払い」で、六四年に進行主任に昇格。評論家の菅孝行が太秦で助監督をしていた時、元やくざの大部屋と大喧嘩をした。彼はドスを持って夜、菅の寮に来た。並河はそれをボコボコにしたらしい。米映画『トラ!トラ!トラ!』(リチャード・フライシャー、深作、舛田利雄七〇年)ではアソシエイトプロデューサーとしてクレジットされている。晩年は門番として、拾った野良猫・野良犬たちとともに撮影所で過ごした。二〇一〇年、八六歳で亡くなった彼の柩を載せた霊柩車が撮影所内を一巡した。並河は小指がなく、全身に刺青を彫っていた。(敬称略)



リハーサル中の菅原文太、田中邦衛、金子信雄
右手前の影は深作欣二監督(筆者撮影)

(敬称略)